

キリシタン伝来のマリア観音の源流をめぐって —中国における聖母像の伝来とその変容—

宮川 由衣

はじめに

1614（慶長19）年に徳川幕府により宣教師追放令が出されたのちも、長崎を中心とする北部九州の一部の地域では、キリスト教の信仰は途絶えることなく継承された。1873（明治6）年にキリシタン禁制の高札が撤去されるまでのおよそ250年間にわたって、密かにキリスト教を信仰してきた人々は、潜伏キリシタンと呼ばれている。彼らは、キリスト教の教義を口承のみで語り継いできたのではなく、祈りと共に「納戸神」や「マリア観音」といった聖像を受け継いできた。このことが、潜伏期の数世代にもわたるキリスト教信仰の継承を可能としたのではなかろうか。この点において、潜伏キリシタンの信仰における聖像の重要性は無視できない。

さて、田北耕也氏は潜伏キリシタンを「納戸神を中心とする平戸・生月地方」と、「日繰帳を中心とする長崎・黒崎地方と五島地方」の二つに分けている¹。このうち、後者の地方に伝わるのが、中国から日本にもたらされた白磁製の観音像、いわゆる「マリア観音」である。ここで、「いわゆる」としたのは、「マリア観音」という呼称は潜伏キリシタンが用いていた言葉ではなく、後世の研究者たちが呼び表した造語だからである²。本来、キリシタンたちは、これらの像を「ハンタマルヤ（サンタ・マリア）」と称していた。1856（安政3）年に肥前国彼杵郡浦上村（現在の長崎市の一部）で百姓の吉蔵を中心とする潜伏キリシタン15名が一斉検挙された、浦上三番崩れの際に長崎奉行所が作成した記録『異宗一件』には、潜伏キリシタンたちが先祖代々受け継いできた「ハンタマルヤ」と称する白焼の仏

を所持し、それを信仰していたと記されている³。東京国立博物館所蔵のマリア観音像（図1）は浦上三番崩れの際に没収されたものである⁴。

「マリア観音」をめぐっては、禁教下にキリシタンたちが表面上仏教徒を装うために信仰し、仏教の観音像に聖母マリアを見立てて拜んだものであると言われてきた⁵。これに対し、若桑みどり氏は、キリシタンたちが開国後に宣教師が再び日本にもたらした聖母マリアの像を「よかサンタ・マルヤさま」と呼んでいたことに注目し、こうした従来の見方に疑問を呈している⁶。すでに述べたように、「マリア観音」というのは後世に用いられるようになった呼称であり、キリシタンたちはこれらの像を「ハンタマルヤ」と呼んでいた。若桑氏は、「キリシタンたちは、いわゆるマリア観音像を観音とは思っていなかったのではないか」として、「キリシタンたちは



（図1）《マリア観音像》、東京国立博物館所蔵

仏教の像にマリアを見立てて拝んだのではなく、この像そのものをマリアとして崇敬したのである」と指摘している⁷。

「マリア観音」と総称される像には、中国製のものと日本製のものがある。このうち、中国製のものは、陶土、技法、造形様式から見て、福建省南部に位置する徳化窯で生産されたと考えられている⁸。徳化窯産の白磁はヨーロッパでは「ブラン・ド・シーヌ (Blanc de Chine, 中国白)」と称され、国内外で高い評価を受けた。筆者は、これまでマリア観音をめぐるとの研究においては参照されることのなかった「ブラン・ド・シーヌ」の国外輸出に注目し、ゴッデン氏が挙げている18世紀初頭のイギリス東インド会社 (The English East India Company) の販売記録に、Sancta Mariaという名称の記載が複数見られることを確認した⁹。これはヨーロッパ向けの「ブラン・ド・シーヌ」の販売記録であり、同様の商品が日本に輸出されたことを示すものではないものの、徳化窯産の白磁像の一部がSancta Mariaという名称で流通していたことは注目すべき点である。すでに見たように、日本にもたらされた白磁製観音像は、キリシタンによってSancta Mariaを意味する「ハンタマルヤ」と呼ばれていた。したがって、中国で作られたこれらの像がマリア像としてキリシタンの手に渡った可能性も考えられる。ただし、「なぜ中国において徳化窯産の白磁像がSancta Mariaとして流通していたのか」、また、「中国で聖母像と観音像との間に何らかの共通的な認識があったのか」という問題については、さらに検討を行う必要がある。そこで本稿では、いわゆるマリア観音の源流を辿って、中国における聖母像の伝来と変容、そして聖母像と観音像との関係について考察したい。

中央アジアを経由したキリスト教の東方伝道

はじめに中国におけるキリスト教の歴史を簡単に振り返っておこう。最初に中国にキリスト教を伝えたのは、ネストリウス派と呼ばれる、コンスタンティノポリスのネストリウス (Nestorius 381頃-

451年頃) を祖とするキリスト教の一派であった。ネストリウスは428年にコンスタンティノポリスの総主教に任ぜられたが、まもなくマリアの称号をめぐる論争が起り、彼の唱える説はエフェソス公会議 (431年) で異端として退けられた¹⁰。その後、ネストリオスの支持者たちはペルシアに逃れ、ネストリウス派のキリスト教は6世紀に中央アジアのトルコ系諸部族に広まったのち、中国にも伝わった。中国の北西部、西安で発見された大秦景教流行中国碑は、ネストリウス派のキリスト教が635年に唐に伝えられたことを示している。ネストリウス派のキリスト教は、中国では景教と呼ばれ、唐から元の時代に栄えた。

一方、ラテン教会のキリスト教は、13世紀にフランシスコ会によって中国に伝えられた。1245年から47年に、中央アジアを経ての東方伝道でピアン・デル・カルピネのヨアンネス (Johannes de Plano Carpini 1190頃-1252) が教皇インノケンティウス4世 (在位1243-54年) の使節としてモンゴルを訪問している。さらに、モンテ・コルヴィーノのジョヴァンニ (Fra Giovanni da Montecorvino 1247頃-1328) がインドを経て元のカンバリック (Khanbalik 大都、現在の北京) に1293年から94年にかけて到着し、宣教許可を得て正式に宣教を開始した。ジョヴァンニは、1307年には教皇クレメンス5世 (在位1305-14年) によってカンバリック大司教に任命されている。その後、1368年の元朝滅亡に伴い、中国におけるフランシスコ会の宣教拠点は消滅した。このため、16世紀後半にイエズス会によって再び中国で宣教が行われる際には、かつて中央アジアを経由して中国に伝えられていたキリスト教の伝統はほとんど忘却されていた。

ローレン・アーノルド氏は、主に13世紀から14世紀にかけてのフランシスコ会によるキリスト教の東方伝道と東西の文化的交流に関する美術史研究において、イエズス会の宣教以前の東アジア地域におけるキリスト教文化の伝播と受容の実態を明らかにしている¹¹。アーノルド氏は、*Princely Gifts and Papal Treasures: The Franciscan Mission to China*

and its Influence on the Art of the West, 1250-1350 (1999) において、「フランシスコ会によって中国にもたらされた聖母像の原型が中国の民間信仰の女神である観音像に吸収され、時を経て観音の新たな型である子安観音像を生み出したのではないかと主張している¹²。したがって、イエズス会のマテオ・リッチ (Matteo Ricci 1552-1610) が東方伝道のために1582年にマカオに到着した際には、ローマ・カトリックの聖母像はすでに中国の大衆文化の中に深く浸透していたという¹³。これは、観音像の源流を辿るうえで重要な指摘である。ヨーロッパ伝来の聖母子像と中国の子安観音像の間に影響関係があることは、ユ・チュンファン氏やジェレミー・クラーク氏らによっても指摘されている¹⁴。以上の点を踏まえ、16世紀後半にはじまるイエズス会による宣教以前の中国におけるキリスト教の伝道とその文化的遺産について見ていきたい。

唐と元王朝におけるネストリウス派キリスト教

中国におけるキリスト教の歴史は、唐朝 (618-907年) の初期に遡る。首都長安 (Xi'an 現在の西安) において、西方から来たシリア語を話すキリスト教宣教師が、唐朝第2代皇帝太宗 (李世民、在位626-49年) に聖書の教えを紹介する巻物を贈呈し、太宗は638年にネストリウス派のキリスト教を自国に受け入れることを公布した。こうして、中国で公式に受け入れられたネストリウス派のキリスト教会は、長安で約300年間自由に礼拝を行った。しかし、外国宗教であるキリスト教は、やがて危険視されるようになった。845年に外国宗教の儀式を禁止する法律が施行されたことにより、キリスト教、仏教、ゾロアスター教、マニ教、そしてイスラム教が中国の都市部から外部へと押し出されていった。

中国では940年から1250年までの間、キリスト教は消滅したか、あるいは地下に潜伏していたが、チンギス・ハーン (在位1206-27年) にはじまるモンゴル帝国の時代に復活を遂げる。中央アジアのモン

ゴル人の皇帝には、多くの有力なネストリウス派キリスト教徒の妻がおり、その妻たちは皇帝たちの母親となった。高位の女性キリスト教徒たちが、元朝の宮廷でネストリウス派キリスト教の影響力を新たに開花させたのである。第4代皇帝モンケ・ハーン (在位1251-59年) と第5代皇帝クビライ・ハーン (在位1260-94年) の母ソルクタニ・ベキ (1190頃-1252) はキリスト教徒であり、彼女の息子たちに、新たに征服下に置かれた民衆のために、中央アジアのステップで宗教的寛容を実践するように勧めた。中国の南北を統一したクビライ・ハーンは、元朝 (1271-1368年) を建国し、母の助言に従った。これにより、パックス・モンゴリカ (Pax Mongolica) と呼ばれる東西交流の平和な時代がはじまり、中国は再び海外との交易に開かれた。そして、唐朝初期のように、あらゆる宗教の外国人が港や都市に集まり、ユダヤ教徒、イスラム教徒、そしてキリスト教徒といった新しい共同体が、泉州、杭州、揚州、そして北京の主要都市で商業を行うようになった。また、各宗派はそれぞれの商店、浴場、礼拝所、そして埋葬地を設立した。泉州の急成長を遂げた海運商人の間におけるネストリウス派キリスト教の強い存在感は、蓮や十字架のシンボルを持つ多くの墓碑に見てとることができる¹⁵。しかし、ヨーロッパから宣教師が到来すると、中国におけるネストリウス派キリスト教はその影響力を失っていった。

13世紀後半から14世紀初頭にかけてのフランシスコ会による宣教

ヨーロッパに侵攻したモンゴル人は、一般にタタール人として知られているが、1250年頃から、モンゴル帝国とヨーロッパとは共にイスラム教徒への対抗から互いに外交的接触を図るようになる。そして、インノケンティウス4世 (在位1243-54年) の治世下で、教皇とモンゴル帝国の皇帝が相互に贈答品を交わして外交を開始すると、世界宣教の使命を掲げるフランシスコ会は、1253年に教皇によって東方伝道のために修道士を派遣する特権を与えられ

た¹⁶。

のちに聖ルイとして列聖されるフランスのルイ9世（在位1226-70年）は、使者のルブルック（Guillaume de Rubrouck）を介して、モンケ・ハーンに装飾写本を贈呈した。ルブルックは1255年にヨーロッパに帰ってきた際に、すでに中国には非ラテン系のキリスト教徒がいたことを報告している。ヨーロッパから来た宣教師に対する元の宮廷での比較的穏やかな扱いは、ネストリオス派キリスト教徒に多くを負っていたと思われる。すでに見たように、モンケ・ハーンと彼の兄弟で後継者のクビライ・ハーンの母であり、非常に影響力のあったソルコクタニ・ベキは、ネストリオス派のキリスト教徒であった。

最初のフランシスコ会出身の教皇であるニコラウス4世（在位1288-92年）は、同胞のモンテ・コルヴィーノのジョヴァンニを中国に派遣した。ジョヴァンニは、1293年の秋、中国の南海岸のザイトン（Zaiton 現在の泉州）に到着したと言われている。首都大都（現在の北京）への旅はさらに3ヶ月かかったため、ジョヴァンニは1294年2月18日に亡くなったクビライ・ハーンに教皇からの書状を贈る機会がなかった可能性が高い。ジョヴァンニは中国における宣教のはじめの苦難、そして高位のネストリオス派キリスト教徒の改宗と約6000人の信者の洗礼による宣教活動の最終的な成功について、母国に書簡で知らせており、その成果に対して教皇から褒章を授与されている。

1307年、教皇クレメンス5世（在位1305-14年）はジョヴァンニを北京の最初の司教に任命し、そこに聖堂を設立することを許可した。ジョヴァンニは宣教活動の最初の10年間は、北京で唯一のフランシスコ会士であったが、1303年頃にケルン出身のドイツ人、アーノルド修道士が合流した。アーノルド修道士が到着する前に、ジョヴァンニは教会の運用のために、まだ宗教を学んでいない7歳から11歳の40人の異教徒の少年を奴隷市場で入手し、彼らのために学校を設立している。1294年にジョヴァンニが北京に到着したとき、彼はほとんど典礼用品を持って

いなかったという。1305年の彼の手紙には、「わたしを持っているのは、短い日禱書と典礼書を収録した、持ち運び可能な聖務日課書だけである」と書かれている¹⁷。彼は、典礼書を写して翻訳することが、彼自身と彼の学校の子どもたちにとっての優先事項であったと述べている¹⁸。また、ジョヴァンニは、北京に建てた二つの教会について報告している。北京の教会について、アーノルド氏は、「具体的には言及されていないが、北京の新しいラテン教会には、中央の目立つ場所に聖母子の像が、おそらく彫刻や絵画で祭壇画として含まれていたことは間違いないだろう」と指摘している¹⁹。聖母子のイメージは、フランシスコ会のイコノグラフィーにおいてとりわけ顕著であり、北京の新しい教会でも礼拝における中心的存在となったのは疑い得ないという。ジョヴァンニを中国に派遣したフランシスコ会出身の教皇ニコラウス4世のもと、ローマのサンタ・マリア・マッジョーレ教会が改築された際には、新たに《聖母の戴冠》と《聖母の眠り》を描いた壮大なモザイク画で飾られている。

フランシスコ会による聖母像の伝来と観音像の変容

1313年頃には新たにヨーロッパからフランシスコ会士たちが到着し、外国貿易のコミュニティにすぐに受け入れられたことで、ジョヴァンニは広州、泉州、杭州、揚州の中国南部の沿岸都市に宣教活動を拡大することができた。フランシスコ会士のフラ・オドリコ（Odoric de Pordenone 1286-1331）は、彼が揚州を訪れた時、この街には三つのネストリオス派の教会と一つのフランシスコ会の建物があったと述べている²⁰。

揚州で見つかったカテリーナ・ヴィリオニスの墓碑（図2）は、フランシスコ会の遺物であると考えられている²¹。1342年に揚州で亡くなった彼女は、同市に住んでいたイタリア人商人の娘である。彼女の墓碑はラテン語で書かれており、その上に彫刻された図像はヨーロッパ由来のものである。この墓碑



(図2) カテリーナ・ヴィリオニスの墓碑、1342年、揚州



(図4) 《聖母子像》(Sedes Sapientiae, 上智の座)、1250年頃、大英図書館所蔵



(図3) カテリーナ・ヴィリオニスの墓碑 (聖母像部分拡大図)

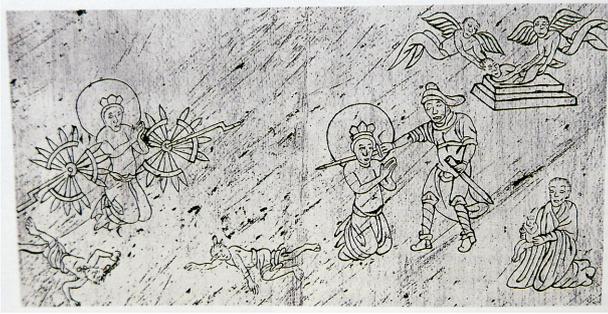
は明らかにフランシスコ会の遺物であり、そのイコノグラフィは、ネストリオス派キリスト教の墓碑とは明らかに異なっている。

カテリーナの墓碑は、「玉座の聖母」(Sedes Sapientiae 上智の座, the Virgin as the Throne of Wisdom) 型の座った聖母によって戴冠されている(図3-4)。アーノルド氏は、フランシスコ会が特に好んだ聖母像としてこの図像を挙げている。この図像の原型は、ヨーロッパから写本を持ってきたフラ

ンシスコ会によって14世紀初頭に中国に伝わったと考えられる。

カテリーナの墓碑において、聖母子の下には4人の天使が描かれ、その下の段にはこの女性の名前の由来となったアレクサンドリアの聖カタリナの殉教の場面が描かれている。聖カタリナは車裂きの刑にかけられて殉教した。その遺体は天使によってシナイ山に運ばれたと言われる。カテリーナの墓碑の左下方には、棘のある大きな処刑用の車輪が描かれている(図5)。車輪の前で跪く人物が聖カタリナであり、頭部には光輪がみとめられる。その右には、兵士の前で殉教する聖カタリナが描かれている。兵士の上には2人の天使がおり、聖カタリナの遺体をシナイ山の墓に降ろしている。この図像について、アーノルド氏は「これらの図像はすべて、『黄金伝説』(Legenda Aurea)の写本に見られる中世のキリスト教の図像の原型が反映されたものとして見ることができる」とし、「ジョヴァンニが彼の修道会に宛てた最初の手紙で、この本の写しを要求していたことを思い出すべきである」と指摘している²²。

兵士の足元の右端には、僧侶のような人物が幼児を抱いているが、これは幼児として表象されたカタリナの魂である。この図像の典拠はキリスト教美術



(図5) カテリーナ・ヴィリオニススの墓碑(墓碑中央部分拡大図)

にみとめられ、フランシスコ会との結びつきの強いローマのサンタ・マリア・マッジョーレ教会のモザイク画《聖母の眠り》においても、キリストは母マリアの亡き魂を抱いている。カテリーナの墓碑は明らかにラテン系キリスト教の遺物であるが、中国式の椅子や天使の足の描写などに中国の土着的な要素がみとめられる²³。

また、アーノルド氏は、「カテリーナ・ヴィリオニススの墓碑の考古学的証拠によって、1342年までに、聖母マリアのイメージが、現地で崇拝されていた民間信仰の女神である観音から、いくつかの図像的要素を取り入れていたことがわかる」と指摘している²⁴。アーノルド氏によれば、揚州の墓碑の聖母像は、観音が中国の民間信仰の女神に発展していく過程の過渡的なイメージとして見るができるという²⁵。マリアは中国式の椅子に座り、中国風の長衣をまとっているが、フランシスコ会の伝統で、彼女は膝の上に幼児を抱いている。アーノルド氏は、「14世紀半ばの揚州では、聖母像を彫った彫師は、このフランシスコ会の聖母像のイメージの機能を高めるために、観音の土着的なアトリビュートを利用していたのではないかと指摘している²⁶。

ところで、もともと中国において観音は女性として信仰されていたのではなかった。インドと中国において、観音は男性として描かれていた。中国におけるその初期の描写である10世紀の敦煌の洞窟壁画では、口ひげを生やした完全に男性の姿としての観音像がみとめられる。その後、この男性的な観音は女神へと変容していった。女神としての観音をめぐるとの伝説は、12世紀に杭州とその海岸地域で起こり、

浙江省の沖合にある普陀山において、神秘的な顕現(ヴィジョン)が見られた1276年までには、観音は女性と見なされるようになっていた。この島は巡礼地となり、観音は特に女性に愛される女神として人気を博した。観音の仏教的なアイデンティティは母胎の世界と結びついているため、女神への変容を完全にするために、中国の民間信仰は観音を、「子どもを授ける女神」、すなわち「子安観音」に変容させたと考えられる²⁷。

アーノルド氏によれば、「13世紀後半から14世紀初頭にかけてのフランシスコ会の到着に伴い中国に伝わった、イデオロギーとイコノグラフィの両方において表された聖母信仰は、この地域での観音の描写にすでに現れていた女性への性別の変化を捉し、新たな影響をもたらした」という。アーノルド氏は、「その宣教の初期の段階から、聖母像とすでに現地で崇拝されていた観音像とは重複した図像を有していたのは明らかであったはずであり、これはフランシスコ会にとって、現地の人の改宗のために有利に働いたと思われる」と述べている²⁸。もっとも、基本的なところでは、観音とマリアは、孝心と女性的貞節という文化的価値観を共有していた。観音がフランシスコ会によってもたらされたマリアのいくつかの側面を引き継いでいるのかどうかをめぐるとの問題については、「明朝より前の観音の描写は、たとえ女性的なかたちであっても、腕に抱かれたり、膝の上に乘せられたりしている男の幼児はほとんど描かれなかった」と指摘し、「観音の図像における宗教的な基礎は仏教の經典に由来するものの、その造形的表現は聖母の図像に影響を受けている可能性がある」という²⁹。

中国におけるヨーロッパのキリスト教の短期間ではあるが、確かな存在感は、明朝(1368-1644年)の台頭と共に終わり、中国は国家主義に戻った。政権が変化したことで、中国のキリスト教が突然途絶えることはなかったが、ラテン系とネストリウス系の両キリスト教コミュニティは、アジアを横断する陸路が閉鎖されたことで外部から司祭が入って来なくなると、徐々に衰退し、宣教活動を停止した。ま

た、イランと中央アジアにおけるティムール (Timur 1336-1405) の統治によって、東西交流のための中央アジアのシルクロードのルートが事実上閉鎖され、中国への陸路が遮断された。

16世紀におけるスペイン・ポルトガルとの貿易開始と象牙製人物像の生産

16世紀になると、「キリスト教徒と香辛料」を求めて、ポルトガルがアジアの海域に進出する。ポルトガルが喜望峰を経由する東周りのルートを発見してからわずか数年後、1511年にマラッカを征服したアフォンソ・デ・アルブケルケ (Afonso de Albuquerque 1453-1515) は、中国と最初の接触を果たす。ポルトガルは1513年に中国との交流を開始するが、海賊行為によって関係が悪化したため、1521年から22年に追放された。その後、約30年間ポルトガル人は、広東省、福建省、浙江省の中国沿岸部で中国人との密輸貿易を行っていた。

当時、インドのゴアに拠点を築いていたポルトガルの宣教師たちは、中国への進出を試みていた。そして1550年代後半、中国の許可により、ポルトガルが広東省のマカオに足掛かりを得ると、ポルトガル人宣教師が殺到した。1556年の冬に中国南部を旅したポルトガル人ドミニコ会士のガスパール・ダ・クルス (Gaspar da Cruz 1520頃-1570) は次のように報告している。

広東のある街で、川の中腹に小さな島があり、そこに僧侶たちの寺院があった。この寺院で、わたしは地面から高い位置にある御堂を見たが、そこでは首元に子どもを抱く、よく出来た女性像があり、燃える松明を持っていた。わたしは、それは何かキリスト教のものではないかと疑って、何人かの一般信徒と僧侶にその女性は何を意味するのか尋ねた。だが、誰もわたしに教えてくれず、その理由を答えることはできなかった。それは古代のキリスト教徒によって作られた聖母像かもしれないし、聖トマスがそ

こに残したか、その機会に作られたのかもしれない。しかし、すべて忘れ去られているというのが結論である³⁰。

この報告について、デレク・ギルマン氏は、「ガスパール・ダ・クルスは、子安観音像を見て、それを幼児キリストを抱く聖母像と見做したのであろう」とし、「彼はこの像に自分が見たいと思っていたものを投影したのであるが、少なくとも一人のヨーロッパ人にとっては、聖母像と観音像は交換可能なものであった」と指摘している³¹。

また、フィリピン総督の書記であったフェルナンド・リゲルは、1574年にルソンに到着して間もないスペイン人と中国の商船団との間で交易が行われていたと報告している³²。中国の商人は高級陶器やその他の品々を持ってきて、それらをスペイン人に売った。そして、6、7ヶ月後に必ず戻ってくると言って、多くの品々を持ってきたが、そこには十字架の像や、ヨーロッパのものと同じように作られた非常に奇妙な印章があったという。また、1580年代には中国の職人によって象牙製のキリスト教の礼拝像が作られていたことがわかっている。ヨーロッパでは、13世紀半ばにパリで開花した象牙彫刻の伝統があった (図6)。ゴシック時代には多くのキリスト教の礼拝像が象牙で作られており、これらは1400年頃に作られなくなった後も、長い間教会で使われ続けていた。ヨーロッパの宣教師が東アジアに渡ってくると、彼らは祭壇を飾るためにゴシック様式の象牙製の礼拝像を現地で注文した。ポルトガルのコレクションには、中国で作られた象牙製のキリスト教の礼拝像が残っている。明朝以前の中国では、象牙を使った彫刻は一般的ではなかったが、16世紀後半からルソンやマニラにおける植民地市場の拡大を背景として、福建省を中心に象牙彫刻の生産が盛んになった。1590年に、マニラのサラザール司教 (Domingo de Salazar 1512-94) は、スペイン国王に宛てた書簡において次のように記している。

中国から来た人々 (Sangleys) は、スペイン人

の職人が作ったものを見るとすぐに、それを正確に再現してしまうほどの技術と賢明さを持っています。最も驚いたのは、わたしが到着した時には、彼らはヨーロッパ風の絵の描き方を知らなかったのですが、今ではこの技術を習得し、筆と彫刻刀の両方を使って素晴らしい作品を制作していることです。わたしが見た象牙製の幼児イエスの像ほど完璧なものは作られないと思います。[……] 教会には、中国の職人が作った、以前は非常に不足していた像が備え付けられはじめています³³。

福建省は、当時中国で唯一、商人が国外に出て活動することを禁ずる明朝の禁制から自由であった³⁴。1628年に刊行された福建省漳州の公報には、「漳州の人々はしばしば大きな船を建造し、遠く離れた外国との貿易を行っている」と記されている³⁵。特に、漳州と関わりが深かったのが、中国の南洋に位置し、漳州から遠くない場所に位置するルソンであった。福建省の学者である何喬遠（He Qiaoyuan 1558-1632）による明朝の私史『名山藏』（*Ming Shan cang*）には、福建省漳州とルソンとの密接な関係が記されている。ギルマン氏は、「ルソンと本国の福建省の両方で、スペイン人と漳州の商人が近い関係にあったことを踏まえると、16世紀後半から17世紀にかけて、漳州が象牙製人物像の生産の中心になったことを理解することができる」と述べている³⁶。

ギルマン氏によれば漳州で作られたスペイン市場の礼拝像は、主に娯楽用の室内装飾品として作られた縁起物の中国風人物像の生産にも刺激を与えたという。ギルマン氏は、「福建省の象牙製の仙人像やその他の国内市場の人物像は、中国におけるスペイン市場のキリスト教の礼拝像に呼応して作られたものであり、その過程を辿るためには、ゴシック様式の聖母像と明朝の中国における観音像の類似性に注目しなければならない」と指摘している³⁷。ギルマン氏は、ヨーロッパで作られたゴシック様式の聖母像（図7）と中国で作られたと考えられる聖母像

（図8）と観音像（図9）を比較し、「ロザリオから十字架を外して数珠の房に置き換え、幼児の手の中にある球や鳩を取り除き、そして高い襟や弓形の仏教の肩掛けなどの中国的なディテールを加えることで、聖母像は観音像に巧みに変換されている」と述べている³⁸。サラザール司教の報告から、スペインの宣教師たちがスペインや北部ヨーロッパで作られた彫像をフィリピンに持ち込んでいたことが明らかである。また、彼らは後期中世の様式を示す図版資料を多く持っており、それらを典礼や伝道活動に使用していた。ギルマン氏によれば、「これらの情報源をもとに、東アジアで活動していた宣教師たちは、当時まだヨーロッパで流通していたゴシック様式の象牙像を模したキリスト教の象牙製礼拝像を近くの福建省の漳州に注文し始めた」という³⁹。また、クレイグ・クルナス氏は、「数ある人気のある仏教や道教の神々の娯楽用の人物像の中で子安観音像は最も重要な商品の一つである」とし、「この像は、実はキリスト教の人物像、特にマリア像を求める外国人による初期の需要に応じて制作されたものである」と述べている⁴⁰。

聖母像と観音像の類似性について、アーノルド氏は、「16世紀にヨーロッパから再び宣教師や商人が到着した際、中国の沿岸部の職人たちは、ポルトガル人が持ち込んだキリスト教の像に合わせて、すでに現地でよく知られた像を素早く簡単に適合させ、マリア像をヨーロッパに輸出するビジネスが盛んになったのではないかと指摘している⁴¹。すでに見たように、揚州の墓碑に見られるようなフランシスコ会の影響を受けた聖母像が14世紀の中国に存在しており、子安観音像の造形的表現は聖母像の図像に影響を受けている可能性があった。このことから、アーノルド氏は、「宣教師が途絶えた後もそれらを所持していた人々の個人の礼拝像として、あるいは子安観音の像に習合したかたちで、聖母像の痕跡が中国に残っていたことが、ヨーロッパ人が現地で作られた象牙の聖母像をヨーロッパに輸出することに興味を示した時に、福建省でこの事業が繁栄した直接的な根拠となったのではないかと主張してい



(図6) 《聖母子》、1250年頃、象牙、フランス、メトロポリタン美術館所蔵



(図8) 《聖母子》、明朝 (1580-1644年頃)、象牙、中国、個人像



(図7) 《聖母子》、1275-1400年頃、象牙、ドイツ、大英博物館所蔵

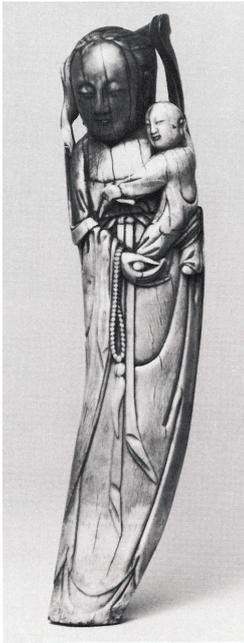
る⁴²。

白磁製観音像に見られるキリスト教的イメージの痕跡

浦上三番崩れの際にキリシタンから没収された東京国立博物館所蔵の白磁製観音像——いわゆる「マリア観音像」——のうち中国製のものは、福建省南部に位置する徳化窯で生産されたものと考えられて

いる。その最盛期は、ヨーロッパへの伝世の状況から17世紀から18世紀とみなされている。本稿では新たな視点として、福建省の徳化窯で白磁製人物像の生産が最盛期を迎えるのに先立って、同省が16世紀に象牙彫刻の中心的生産地であったことに注目したい。福建省では、ヨーロッパからもたらされたキリスト教の礼拝像をモデルにした象牙製のキリスト教の礼拝像が作られ、それに呼応して、象牙で仙人像や観音像などの中国風人物像が作られるようになったのであった。福建省の徳化窯では、陶磁器の中でも特に人物像が代表的な製品であり、『天工開物』(1637年)には、「徳化窯はただ仙人や精巧な人物や玩具だけを焼き、実用には適しない」と記されている⁴³。以上の点を踏まえると、福建省では16世紀に繁栄した象牙彫刻市場が基盤となって、象牙彫刻に代わる、より安価で量産可能な室内装飾品として登場した白磁製人物像の生産が発展し、17世紀から18世紀にその最盛期を迎えたと考えられる。

福建省の徳化窯産の白磁製人物像の主なモチーフは、スペイン・ポルトガルの植民地市場向けの礼拝像の生産に影響を受けて発展した仙人像や観音像などの中国風人物像であった。徳化窯産の白磁像は、ヨーロッパでは「ブラン・ド・シーヌ (Blanc de Chine, 中国白)」と称され、高い評価を受けてい



(図9)《観音像》、明朝（1580-1644年頃）、象牙、中国、個人像



(図11)《マリア観音像》、東京国立博物館所蔵



(図10)《聖母像》、清朝（1690-1750年頃）、白磁、中国福建省徳化窯、大英博物館

た。ヨーロッパに輸出された白磁製人物像の中には、聖母像に近い作例も含まれている（図10）。これらの像においては、一般的な観音像とは異なり、人物像の頭髪が縮毛であり、特に幼児の容貌はヨーロッパの人物像に近い。ただし、聖母の平面的な顔立ちや中国風の長衣、そしてしばしば聖母子と共に表される獅子のモチーフなどを考慮すると、これらの像はヨーロッパの聖母像と中国の観音像の折衷

様式であると言えるだろう。こうした聖母像と観音像の折衷様式の白磁製人物像は、ポルトガルやスペインから東アジアに来た宣教師の注文によって作られたものであり、恐らく、インドやフィリピンのキリスト教徒の入植地で作られた彫像をコピーしたものと考えられている⁴⁴。こうした白磁製人物像の作例は少なく、徳化窯産の白磁像の中で特に人気があったのは観音像であった。日本に伝来しているものと同じように、観音が子どもを抱く典型的な観音像は、18世紀初頭のイギリスの東インド会社の貨物リストでは、Women with childやSancta Mariasと記載されている⁴⁵。例えば、1701年にイギリスの東インド会社のダッシュウッド号が福建省南東部の廈門（アモイ）で積荷を積み、1703年にロンドンのオークションで落札された貨物のリストには、Sancta Mariaという名が挙げられている⁴⁶。このSancta Mariaという記載について、ゴッデン氏は、「これらはヨーロッパに輸出され、販売される際に、その地域の人々の関心に適応して、ヨーロッパの名前を与えられたのではないかと指摘している⁴⁷。すでに見たように、日本にもたらされた白磁製観音像は、キリシタンによってSancta Mariaを意味する「ハンタマルヤ」と称されていたのであった。



(図12) 《マリア観音像》、17世紀、中国福建省徳化窯、東京国立博物館所蔵



(図13) 《マリア観音像》、17世紀、中国福建省徳化窯、東京国立博物館所蔵

白磁製人物像の原型であったと考えられる象牙製人物像においては、キリスト教的モチーフを取り除き、中国的なディテールを加えることでイメージの変換が行われた可能性があった。また、白磁製人物像の中には、ヨーロッパの聖母像と中国の観音像の折衷様式の作例が見られ、典型的な観音像においても、その受容者によって、これらの像は「観音」とも「聖母像 (Sancta Maria)」ともなる可変的な存在であった。そのルーツを考慮すれば、白磁製の観音像の内に、聖母像としての面が内包されていることは否定できない。故に、この図像の源流に聖母像の存在があったことが、「観音像とマリア像のあい」とも言うべき白磁製観音像、いわゆるマリア観音の性格を特徴づけていると言えよう。こうした見通しのもと、キリシタンによって所持され、浦上三番崩れの際に没収された白磁製観音像を見ていきたい。

日本に伝わった白磁製観音像の図像は大きく分けて3種に識別される⁴⁸。第1の型は、子どもを抱いていない立像で、波または雲の台座の上に立ち、瓔珞を胸元に垂らすもの(図11)、第2の型は、座像で、胸の中央または脇に子どもを抱き——子どもを抱いていない、あるいは子どもが脱落してしまった



(図14) 《玉座の聖母》、1200-50年頃、象牙、スペイン、メトロポリタン美術館所蔵

と思われるものもある——、片膝を立てて座り、瓔珞をつけ、多くは白布を頭にかぶるもの(図12)、そして第3の型は、玉座に座り、白衣をかぶり、膝上正面に子どもを抱き、足下に龍を踏み、左右に脇侍のような小型の人物像を従えるタイプである(図13)。このうち、ここでは第3の型を玉座型観音像と呼び、この図像様式について検討したい。玉座型観音像は東京国立博物館所蔵の浦上三番崩れの没収

品にも20点含まれている。

明および清朝に流行した白衣観音の図像では、観音はしばしば男女の2人の若い従者を伴って表されている⁴⁹。これは観音にまつわる以下の伝説に基づいている。長年、子どもに恵まれなかった両親のもとに、「富をもたらず少年」という預言を受けて生まれたシャンカイ (Shancai, God-in-Talent, Sudhana) は、ある時、観音の顕現にまみえ、その従者となった。また、ロンニュー (Longnü, Nāgakanyā, Dragon Daughter) は、観音によって蛇から少女の姿に変身し、観音に従う。蛇の毒は浄化され、知恵の真珠を産み出したという。玉座型観音像において、観音を囲む2人の従者は、この観音に関する伝説に登場する2人の従者シャンカイとロンニューである⁵⁰。

白磁の玉座型観音像は、観音にまつわる伝説に登場する2人の弟子たちを配置して、その物語を表した説話的な彫像であり、中国の民間信仰に基づく像である。しかし、その造形表現においては、キリスト教的イメージの要素を含んでいる可能性が考えられる。筆者は、この白磁製の玉座型観音像において、玉座の聖母像の図像様式が継承されている可能性を指摘したい。すでに見たように、玉座の聖母像はフランシスコ会が特に好んだ聖母像であり、その図像は14世紀の揚州の墓碑にも見られた。アーノルド氏は、中国にこの図像がもたらされた可能性について、「フランシスコ会が制作した典礼書の装飾写本が壁画の手本としての役割を果たした可能性もあるが、彫刻が施された祭壇画のためには、ケルンやパリで制作された個人の礼拝のために使用されていたトリプティック（三連祭壇画）に見られるような、象牙彫刻の小さな奉納画を含む、他のものが参考にされた可能性もある」と指摘している⁵¹。

すでに見たように、ヨーロッパでは13世紀半ばのパリを中心とした象牙彫刻の伝統があり、多くのキリスト教の礼拝像が象牙で作られていた。中国でフランシスコ会による宣教が行われた13世紀後半から14世紀初頭には、ヨーロッパにおける象牙製礼拝像の生産が盛んであった時期と重なっている。小型の象

牙彫刻は、持ち運びに便利であり、ヨーロッパの裕福な商人やその家族が所有することも珍しくなかった。また、こうしたゴシック様式の象牙製礼拝像は、象牙彫刻の生産の最盛期を過ぎた15世紀以降も引き続き用いられていたため、16世紀に再び中国にきたヨーロッパの宣教師によってもたらされた可能性も低くはない。実際、マニラのサラザール司教によって報告されているように、中国の職人たちは、スペインで作られた礼拝像を正確に再現しており、その技術の高さは宣教師たちを驚かせるものであった。

仙人や観音といった中国の伝承に基づく人物像は、元来、絵画などの他のメディアで表現されることはあったが、明朝以前は象牙を使った彫像は一般的ではなかった⁵²。したがって、中国における小型の室内装飾品としての象牙製人物像の伝統は、スペイン・ポルトガルとの貿易開始とそれに伴うキリスト教の礼拝像の需要に影響を受けて発展した新しい芸術分野であった。中国の職人たちは、室内装飾品としての小型の象牙彫刻という新たなメディアにおいて中国の伝承に基づく像を表象する際に、ヨーロッパ由来のキリスト教の礼拝像の型（図像様式）を応用したのではないだろうか。ユ・チュンファン氏は中国においてキリスト教の聖母像が、中国の象牙製人物像のモデルとなった可能性を指摘し、「同じ芸術コミュニティがキリスト教の礼拝像を制作していたため、聖母像がある程度中国的に見え、観音像がほとんどゴシック的に見えても不思議ではない」と指摘している⁵³。したがって、白磁製の玉座型観音像においては、玉座の聖母像の基本的な図像様式——幼児を抱く女性が玉座に座っている——が引用された可能性がある。象牙像あるいはその他の媒体によって伝来した玉座の聖母像が、中国の職人によってコピーされ、その型が観音像の図像様式に応用されたのではないだろうか。白磁製の玉座型観音像は、こうした中国製の象牙の人物像をモデルに作られたか、あるいは、白磁で新たな型を作る際に、ヨーロッパ由来の象牙やその他のメディアに表された聖母像が参照された可能性がある。



(図15) 《玉座の聖母》、1280年頃、オークに着色、ドイツ、メトロポリタン美術館所蔵



(図16) マリア観音像部分図、17世紀、中国福建省徳化窯、東京国立博物館所蔵

図14は13世紀にスペインで作られた象牙製の玉座の聖母像である。聖母の足下ではドラゴンが倒されており、これによって聖母の勝利が表象されている。また、聖母と幼児は共に球体（林檎あるいは球）を持っている。林檎は、イエスが新しいアダム、マリアが新しいイブであることを象徴するモチーフである。また、球（orb）は地球を象徴し、キリストの王権が全世界に及ぶことを表している。ドラゴンを踏む聖母は詩篇に基づく表現であり、そこでは「あなたは獅子と毒蛇を踏みにじり、獅子の子と大蛇を踏んで行く」（詩篇91, 13）と謳われている。こうした象牙彫刻の他にも、ドラゴン

を踏む聖母を表したゴシック様式の彫像が残っている（図15）。観音が足下に龍を踏んでいる図像は、玉座型観音像を特徴づける要素の一つであるが、そのイメージは、ドラゴンを踏む聖母の図像に影響を受けている可能性がある。

また、玉座型観音像のもう一つの特徴として、観音を囲む2人の従者が挙げられるが、このうちの一方の人物は球を持っている（図16）。2人の従者は、先に見た観音の2人の従者シャンカイとロンニューであり、球を抱く人物像がロンニューで、球は真珠を表していると考えられる。観音によって蛇から少女へと変身したロンニューは、その毒が浄化され、知恵の真珠を産み出したのであった。玉座型観音像におけるロンニューの人物像に注目すると、その長衣は西洋風であり、特に襟の部分は当時ヨーロッパで流行していたひだえり襷襟のように見える。また、頭髪の表現は、もう一方の人物像のシャンカイ——頭頂部と左右の側頭部の髪を残し、他の部分を剃り上げたからこまげ唐子髷——とは対照的に、ヨーロッパの人物像に見られるような縮毛である。当時、東アジアにはヨーロッパから球を持つ幼児の姿で表された救世主キリスト像（Salvator Mundi）が数多く伝来していた。真珠を抱くロンニューの像においては、これらのキリスト教的イメージが引用されている可能性がある。玉座型観音像の造形は、基本的な型として玉座の聖母像を引用し、そのモチーフにおいては、ヨーロッパ由来の人物像に表されたキリスト教的イメージ——「ドラゴン」や「球」——が、中国の伝承に基づくイメージ——「蛇（龍）」や「真珠」——に変換されている可能性を指摘したい。

おわりに

本稿では、キリシタンによって「ハタマルヤ」と称され、祈りと共に受け継がれてきた、いわゆるマリア観音の源流を辿って、この白磁製観音像が作られた中国における聖母像の伝来と変容、そして聖母像と観音像との関係について考察を行った。揚州で見つかったカテリーナ・ヴィリオニスの墓碑

(1342年)は、13世紀後半から14世紀初頭にかけてのフランシスコ会によるキリスト教の東方伝道において聖母像がもたらされたことを示している。この墓碑には、フランシスコ会によって好まれた図像である玉座の聖母の図像がみとめられた。その後、ヨーロッパとの交易が制限されたことにより、中国におけるキリスト教の文化は一旦途絶えるが、ヨーロッパからもたらされた聖母像のイメージは、中国の民間信仰の女神、子安観音への変容というかたちで継承された可能性が指摘されていた。観音は元来男性として表象されていたが、女性的な姿へと変容していった。このうち、子どもを抱く女性として表象される子安観音の造形表現は、聖母像の影響を受けている可能性があった。

16世紀になると、スペイン・ポルトガルの入植に伴い、再び東アジアにヨーロッパの宣教師が到来した。これによるキリスト教の礼拝像の需要を背景として、中国では福建省を中心に象牙彫刻の生産が発展した。そこでの象牙産業の繁栄が基盤となり、同省では象牙彫刻に代わる、より安価で量産可能な室内装飾品として白磁製人物像の生産が発展したと考えられる。このうち数多く生産された観音像は、ヨーロッパ向けの市場ではSancta Mariaという名称で流通していた。このことから示されるように、白磁製観音像は、受容者によって「観音」とも「聖母像 (Sancta Maria)」ともなる可変的な存在であった。以上のことから、キリシタンによってSancta Mariaを意味する「ハンタマルヤ」と称されて受け継がれたマリア観音の図像の源流には聖母像の存在があり、そのルーツ故に、これらの像は自ずと聖母像としての性格をも併せ持つものであったと言えるだろう。

註

- 1 田北耕也『昭和時代の潜伏キリシタン』日本学術振興会、1954年、pp. 7-9。
- 2 「マリア観音」という呼称については、永山時英氏が1925年に『吉利支丹史料集』に使う以来とされているが、それ以前にも、芥川龍之介が短編「黒衣聖母」(1920年)において、「麻利耶観音像」を登場させており、1920年頃から「マリア観音」という造語が用いら

れていた。それらの像は主に白磁製観音像を指していた。「黒衣聖母」で芥川は、麻利耶観音と称するのは、「切支丹宗門禁制時代の天主教徒が屢 聖母麻利耶の代わりに礼拝した、多くは白磁の観音像である」と書いている。(日沖直子「マリア観音」大谷栄一、菊地暁、永岡崇編『日本宗教史のキーワード——近代主義を超えて』慶應義塾大学出版会、2018年、pp. 62-68。)

- 3 岡部駿河守、1860年頃、「肥前国浦上村百姓共異宗信仰いたし候一件の儀に付申上候書付」他、谷川健一編『日本庶民生活史料集成』第十八巻、三一書房、1972年、pp. 833-837。
- 4 東京国立博物館で所蔵されている長崎奉行所による没収品は確かなものとして知られているが、他の多くの「キリシタン資料」と同様に「マリア観音」の場合も、後世に作られた模造品が多く出回っており、潜伏キリシタンによって所持、崇敬されたことが確実なものはほとんどないのが現状である。こうした現状を踏まえ、中園成生氏は検証が確かである外海・浦上系かくれキリシタン信仰の像に限って、史料に記載された名称である「ハンタマルヤ像」を用いることを提唱している(中園成生『かくれキリシタンの起源—信仰と信者の実相』弦書房、2018年、pp. 424-425)。
- 5 片岡弥吉氏は「マリア観音」について、「これらの観音像は多くシナ焼きで、純粹の仏像として日本に渡来したものが、潜伏時代のキリシタンたちに、サンタ・マリアとして祭られたものであった。[……] 観音像すなわちマリア観音ではなく、サンタ・マリアのイメージを求めて禁制時代の潜伏キリシタン、或はこんにちのかくれキリシタンたちが祭っていたという由緒があって始めてマリア観音たり得る」としている(片岡弥吉『かくれキリシタン——歴史と民俗』NHKブックス、1967年、pp. 243-244)。
- 6 若桑みどり『聖母像の到来』青土社、2008年、pp. 333-378。
- 7 若桑氏は、「マリア観音の源流は、古代ペルシャ、古代インドの母女神を原型とする観音菩薩の一変化として大乘仏教世界に流布したものであり、それが中国における土俗的な送子娘 娘神と融合することによって形成された送子観音として子どもを抱く母の姿を獲得した」としている。子安観音については、「日本には土俗的な子授け信仰として古代から子安明神信仰があり、これが鎌倉時代以降観音菩薩と融合し、子安観音として信仰された」と述べている。以上の点を踏まえ、若桑氏は中国におけるマリア像の東洋化について、「中国布教において聖母の東洋化を促進したマテオ・リッチの影響下で、16世紀半ば以降観音型聖母像が形成され、17世紀半ば以降に、禁教潜伏時代の日本キリスト教徒はこれを輸入、また後期にはみずから製作した」と指摘している。これに対し、本稿ではマテオ・リッチの東方伝道以前、すなわち13世紀後半から14世紀初頭にかけてのフランシスコ会による宣教の際に聖母像がもたらされ、それが中国の子安観音像に影響を与えたとする研究に注目する。さらに、16世紀のスペイン・ポルトガルとの貿易開始に伴う、中国における象牙製のキリスト教の礼拝像の生産に光を当て、これを基盤に発展したと考えられる白磁製人物像の造形とその原型について考察する。
- 8 『東京国立博物館図版目録 キリシタン関係遺品篇』東京国立博物館、2001年。
- 9 宮川由衣「サンクタ・マリアとしての白磁製観音像——潜伏キリシタン伝来の『マリア観音』をめぐって」西南学院大学博物館研究紀要第8号、2020年所収。イギリス東インド会社の販売記録におけるSancta Mariaの記載については以下を参照。Godden, Geoffrey. A. *Oriental Export Market Porcelain and its Influence on European Wares*, Granada, London, 1979, pp. 257-280.
- 10 ネストリオスはマリアに対する称号「テトコス」(神の母)はふさわしくなく、「キリストコス」(キリストの母)と呼ぶべきだと主張した。ネストリオスの教説はアレクサンドリアのキュロスから攻撃され、430年のローマ教会会議、431年のエフェソス公会議で異端として退けられた(上智学院新カトリック大事典編纂委員会編

- 『新カトリック大事典』Ⅲ、研究社、2002年、pp. 1571-1574)。
- 11 Arnold, Lauren. *Princely Gifts and Papal Treasures: The Franciscan Mission to China and its Influence on the Art of the West, 1250-1350*. Desiderata Press, San Francisco, 1999. Arnold, Lauren. "Christianity in China: Yuan to Qing Dynasties, 13th to 20th Centuries" In *Christianity in Asia: Sacred Art and Visual Splendour*, Asian Civilisations Museum, Singapore, 2016, pp. 136-144.
 - 12 Arnold, 1999, p. 151, Arnold, 2016, p. 138.
 - 13 Arnold, 1999, pp. 134-151, Arnold, 2016, p. 138.
 - 14 Yü, Chün-fang. "Guanyin: The Chinese Transformation of Avalokitesvara." In Weidner, Marsha Smith. (ed.), *Latter Days of the Law: Images of Chinese Buddhism 850-1850*. University of Hawaii Press, Honolulu, 1994, pp. 151-178. Yü, Chün-fang. *Kuan-yin: The Chinese Transformation of Avalokitesvara*, Columbia University Press, New York, 2001, Clarke, Jeremy. *The Virgin Mary and Catholic Identities in Chinese History*, Hong Kong University Press, Hong Kong, 2013, pp. 24-31.
 - 15 中国におけるネストリオス派キリスト教の遺物は以下を参照。Iain Gardner, Samuel Lieu, and Ken Parry, eds, *From Palmyra to Zayton: Epigraphy and Iconography*, Brepols, Turnhout, 2005.
 - 16 フランシスコ会の第2会則12章「サラセン人その他の不信仰の人々への説教」に基づき、キリスト教的ヨーロッパの外への宣教は、フランシスコ会の重要な使命となった。創設者であるアッシジのフランチェスコ (Franciscus Assisiensis 1181/1182-1226) 自身、1219年に聖地およびエジプトを訪問し、キリストの教えをスルタンの前で説いた。1220年同時期、ベラルドゥス率いる5人の兄弟たちがモロッコに行き、マラケシュで殉教し、1227年にはダニエル率いる6人のフランシスコ会士がセウタで殉教した (上智学院新カトリック大事典編纂委員会編『新カトリック大事典』Ⅳ、研究社、2009年、p. 410)。中国におけるフランシスコ会の宣教については以下を参照。Moule, Arthur C. *Christians in China Before the Year 1550*, London, Society for Promoting Christian Knowledge, 1930, Arnold, 1999.
 - 17 Moule, *op. cit.*, p. 173, Arnold, 1999, p. 49.
 - 18 Moule, *op. cit.*, p. 176, Arnold, 1999, p. 50.
 - 19 Arnold, 1999, p. 53.
 - 20 *ibid.*, p. 138.
 - 21 1951年11月に発見されたカテリーナ・ヴィリオニスの墓碑はイエズス会士のフランシス・ルーロー神父によって1954年の論文 (Rouleau, Francis A. "The Yangchow Latin Tombstone as a Landmark of Medieval Christianity in China," *Harvard Journal of Asiatic Studies*, 17, December 1954, nos. 3, 4, pp. 346-365) において初めて西欧に紹介された。ルーロー神父が1952年に中国を離れる直前に送られたカテリーナ・ヴィリオニスの墓碑の拓本は、サンフランシスコ大学のリッチ研究所 (Ricci Institute at the University of San Francisco) に所蔵されている (Arnold, 1999, p. 186)。墓碑の本体はカテリーナの兄弟であるアントニオ・ヴィリオニスの墓碑と共に揚州博物館に所蔵されている。
 - 22 Arnold, 1999, p. 139.
 - 23 Rouleau, *op. cit.*, p. 355.
 - 24 Arnold, 1999, pp. 140-141.
 - 25 *ibid.*, p. 141.
 - 26 *ibid.*, p. 141.
 - 27 *ibid.*, p. 141.
 - 28 *ibid.*, p. 142.
 - 29 Yü, 1994, p. 173, Arnold, 1999, p. 142.
 - 30 *Tractado da China, Evora. 1569, fol. K iii* (Moule, *op. cit.*, p. 13 英語訳を参照)。
 - 31 Gillman, Derek. "Ming and Qing Ivories: Figure Carving." In *Chinese Ivories from the Shang to the Qing*, Oriental Ceramic Society and The British Museum, London, 1984, p. 41.
 - 32 Blair, E. H. and Robertson, J. A. (ed.), *The Philippine Islands*, Taipei, 1962, reproduction of the Cleveland 1903-1909 edition, vol. 3, 1569-1576, pp. 243-245を参照。1574年のリゲルの文書はシマンカスのアーカイヴに収録されている。書架番号は"Secretario de Estado, leg. 155."。リゲルのこの文書は、Gillman, *op. cit.*, p. 37, Arnold, 1999, p. 148に引用されている。
 - 33 1590年のサラザール司教の書簡は"Simancas-Eclesiastico; Audiencia de Filipinas; cartas y expedientes arzobispo de Manila vistos en el Consejo; años de 1579 á 1599; est. 68, caj. 1, leg. 32 (Blair, E. H. and Robertson, J.A. (ed.), *The Philippine Islands*, Taipei, 1962, vol. 7, 1588-1591, p. 226を参照)。
 - 34 Gillman, *op. cit.*, p. 38.
 - 35 Elvin, Mark. *The Pattern of the Chinese Past*, Eyre Methuen, London, 1973, p. 224.
 - 36 Gillman, *op. cit.*, p. 39.
 - 37 *ibid.*, p. 39.
 - 38 *ibid.*, pp. 40-41.
 - 39 *ibid.*, p. 39.
 - 40 Clunas, Craig. *Art in China*, Oxford University Press, Oxford, 1997, p. 129.
 - 41 Arnold, 1999, p. 151.
 - 42 *ibid.*, p. 150.
 - 43 『天工開物』 藪内清訳、平凡社東洋文庫(130)、1969年、p. 140。
 - 44 Ayers, John. *Blanc de Chine: Devine Images in Porcelain*, China Institute Gallery, New York, 2002, p. 105. ドネリー氏はブラン・ド・シーヌの白磁像のうち、キリスト教の影響が見られる像について、「ここに見られる影響は明らかに17世紀の完全にカルヴァン派の影響にあったオランダではなく、ポルトガル人あるいはイエズス会士のものである」と指摘している (Donnelly, P. J. *Blanc de Chine: the porcelain of Têhua in Fukien*, Faber, London, 1969, p. 196)。
 - 45 Godden, *op. cit.*, p. 259.
 - 46 *ibid.*, p. 266.
 - 47 *ibid.*, p. 261.
 - 48 若桑, *op. cit.*, p. 342。
 - 49 Idema, Wilt L. *Personal Salvation and Filial Piety: Two Precious Scroll Narratives of Guanyin and her acolytes*, University of Hawaii Press, Honolulu, 2008, p. 30. シャンカイとロンニューが観音の従者になる経緯については、16世紀の『南海観音全傳』 (*Nanhai Guanyin quanzhuan*) に記されている。その内容はIdema, *ibid.*, を参照。
 - 50 Ayers, *op. cit.*, p. 99.
 - 51 Arnold, 1999, p. 53.
 - 52 Gillman, *op. cit.*, p. 35.
 - 53 Yü, 2001, p. 259.
- [挿図出典]
- (図1)《マリア観音像》(C-602)、国指定重要文化財、長崎奉行所旧蔵品、東京国立博物館所蔵 (Image: TNM Image Archives)。
 - (図2)カテリーナ・ヴィリオニスの墓碑、1342年、揚州 (*Gravestone of Katerina Vilionis*, 1342, Yangzhou, China, Carved stone rubbing quoted from Arnold, 1999, p. 138)。
 - (図3)カテリーナ・ヴィリオニスの墓碑 (聖母像部分拡大図) (*Madonna of Humility*, detail of gravestone of Katerina Vilionis, died 1342, Yangzhou, China, quoted from Arnold, 1999, p. 134)。
 - (図4)《聖母子像》(*Sedes Sapientiae*, 上智の座)、1250年頃、大英図書館所蔵、*Virgin and Child (Virgin as the Sedes Sapientiae)*, Matthew Paris, ca. 1250, frontispiece to his *Historia Anglorum*, Ink and color

- on parchment, The British Library, London, MS Royal 14 C VII fol. 6r, quoted from Arnold, 1999, p. 42)。
- (図5)カテリーナ・ヴィリオニスの墓碑(墓碑中央部分拡大図)(*Martydom of St. Catherine, detail of Gravestone of Katerina Vilionis*, 1342, Yangzhou, Carved stone rubbing quoted from Arnold, 1999, p. 146)。
- (図6)《聖母子》、1250年頃、象牙、フランス、メトロポリタン美術館所蔵(*Virgin and Child*, ca. 1250, North French, Ivory, Public Domain from The Metropolitan Museum of Art, New York)。
- (図7)《聖母子》、1275-1400年頃、象牙、ドイツ、大英博物館所蔵(*Virgin and Child*, ca. 1275-1400, German, Ivory, Public Domain from The British Museum, London)。
- (図8)《聖母子》、明朝(1580-1644年頃)、象牙、中国、個人像(*Virgin and Child*, Ming dynasty, ca. 1580-1644, Private Collection, quoted from Gillman, 1984, p. 63)。
- (図9)《観音像》、明朝(1580-1644年頃)、象牙、中国、個人像(*Figure of Guanyin holding a child*, Ming dynasty, ca. 1580-1644, Private Collection, quoted from Gillman, 1984, p. 40)。
- (図10)《聖母像》、清朝(1690-1750年頃)、白磁、中国福建省徳化窯、大英博物館(*Virgin and Child*, ca. 1580-1644, China, Dehu Ware, Public Domain from The British Museum, London)。
- (図11)《マリア観音像》(C-600)、国指定重要文化財、長崎奉行所旧蔵品、東京国立博物館所蔵(Image: TNM Image Archives)。
- (図12)《マリア観音像》(C-610)、国指定重要文化財、中国福建省徳化窯、17世紀、長崎奉行所旧蔵品、東京国立博物館所蔵(Image: TNM Image Archives)。
- (図13)《マリア観音像》(C-612)、国指定重要文化財、中国福建省徳化窯、17世紀、長崎奉行所旧蔵品、東京国立博物館所蔵(Image: TNM Image Archives)。
- (図14)《玉座の聖母》、1200-50年頃、象牙、スペイン、メトロポリタン美術館所蔵(*Enthroned Virgin and Child*, ca. 1200-1250, Made in probably Aragon or Navarre, Spain, Spanish, Ivory, traces of paint, Public Domain from The Metropolitan Museum of Art, New York)。
- (図15)《玉座の聖母》、1280年頃、オークに着彩、ドイツ、メトロポリタン美術館所蔵(*Enthroned Virgin and Child*, ca. 1280, German, Oak, with paint, Public Domain from The Metropolitan Museum of Art, New York)。
- (図16)マリア観音像部分図、17世紀、中国福建省徳化窯、東京国立博物館所蔵、図13《マリア観音像》(C-612)の部分拡大図、国指定重要文化財、中国福建省徳化窯、17世紀、長崎奉行所旧蔵品、東京国立博物館所蔵(Image: TNM Image Archives)。

宮川 由衣 (みやかわ ゆい) 西南学院大学非常勤講師